

世話人所感 No. 8

『ピンチをチャンスに』

坂下 玲子

看護未来塾第6回勉強会が平成 31 年3月9日に兵庫県立大学・日本赤十字大学で開催されました。時間がたってしまいましたが、その時の学びを踏まえ所感を書きます。勉強会では、参加者すべてが一個人として尊重され、自分の意見を話すことが前提とされています。ですから、どのような偉い方も皆、「〇〇さん」で呼び合います。ここでもそれを踏襲させていただきますことお許ください。

勉強会では2つのテーマがありました。テーマ 1 は、「看護教員と臨床のつながり方改革」で、竹原歩さん(当時:兵庫県立大学、現:兵庫県立姫路循環器病センター)が、御自身の経験ー臨床から大学院に進学し専門看護師として病院で勤務した後、教員として大学へ戻った経緯を話されました。教員をしながら、病院で非常勤として臨床実践を進め、大学で得た事を還元している状況が語られ、再び臨床へ進むことを話されました。大変うれしかったのは、同様に大学に身を置きながら臨床実践を進めている若手教員達が次々と自身の経験を語り始めたことでした。今回は東京の日本赤十字大学と遠隔で中継していたためにマイクの位置は固定せざるを得ませんでしたが、そこに列ができたことは、うれしい驚きでした。多くの人の中で自分の考えを述べることは、大変に勇気があることです。自身が直面しているジレンマを語り、それを解決するための業務調整や努力は、参加者を勇気づけてくれました。感謝です。

テーマ 2 は、「ここは譲れない!!看護の本質」として秋元典子さん(甲南大学)が御自身の入院体験から、「その人」を尊重し療養生活を支援する看護の本質が置き去りにされている臨床の現状を話されました。一言一言が胸に刺さるお話でした。続いて、看護の継続性が電子カルテによって脅かされている現状が、黒田貴子さん(兵庫県立大学)、北山奈央子さん(姫路医療センター)から話されました。中西さんからは、質の高い看護実践のために何が必要な情報なのか十分検討されていないこと、情報リテラシーがある看護師が少ないため電子カルテ導入の際には業者に勧められるまま何でも入れてしまう傾向があることが示されました。すなわち、電子カルテは不必要な情報であふれ探すのに時間がかかる一方、肝心の情報は記録されない傾向にあるということです。また、電子カルテ情報の多くは看護師が入力しておりそのために膨大な時間が取られています。かくいう私も電子カルテのしわ寄せが看護ケアを脅かしていることを知ったのは一昨年のことでした。「ボーっと生きてんじゃねーよ!」というチョコちゃんのお叱りが聞こえてきそうです。

ピンチをチャンスに!

「看護の危機」は増大しているように感じます。米国では NP、DNP 発展の陰で、PhD(博士号)取得を目指す人が激減し、看護学という学問が危機を迎えているように感じます。日本では、第6回勉強会でも問題提起されたように看護の本質が置き去りにされた病棟が増えています。雨後の筍のように作られる4年制大学では数遊びのような研究が繰り返されているように感じます。

しかし、危機なのは看護界だけでなく、世界的に様々な局面で危機を迎えているように思います。一方で、この閉塞感は時代が新しいシステムを求めている現れだと考えています。ルネッサンス期以来、私達が信じ推し進めてきた実証主義(科学)は地球の破壊を生み頼っても幸せになれそうもない、2つの世界大戦を超え夢見てきた「自由・平等」は一向に達成されずに格差は広がるばかり。そんな中、ポストモダニズムといわれる新たな思想が次々提案されているのだと思います。医療システムに目を移すと、病院を中心とした医療システムは、感染症が猛威を振るっていた時代に作られたもので、慢性疾患(いわゆる生活習慣病)には対応できていません。多くの人が入退院を繰り返しながら悪化する状況がそれを物語っています。今こそ、健康問題を抱えながらも人々が充実して生きることを支える看護の出番だと考えます。その意味において私は看護小規模多機能型居宅介護(看多機)に注目しています。看多機は地域で療養する人が自宅を中心としながらも、必要に応じて訪問看護を受け、リハビリ等に通い、泊まりもできる仕組みで、利用者さんの生活全体を共に構築することが可能な仕組みです。残念ながら現実には厳しく普及にはいたっていませんが・・・。

花は香り続ける

令和元年、図らずもその幕開けの5月1日に En-OK Im 氏(Duke 大学)をお招きし、「実践と結びつけた看護理論をつくるー状況特定理論の構築について」というセミナーを開催しました。連休の中日にもかかわらず80名を超える参加があり、「実践の現象を形式知として構築したい」という熱意を感じました。専門看護師や臨床からの参加が多かったこともうれしいことでした。臨床、教育、研究の乖離が指摘されていますが(確かにそうですが)、臨床家が研究すなわち知の構築に関心を持ち続けているのは日本の強みです。また、専門分化した欧米のシステムとは異なり、日本では一人が複数の役割を引き受け何でもやらなければなりません。臨床、教育、研究を融合するには有利な土壌と考えることもできます。未来塾の勉強会で発言した若手教員らは、積極的に臨床に出て、その知を構築しています。看護現象を捉える目と、それを表す言葉を持った世代の成長を感じます。どのような場所に置かれても咲くのが東洋のしなやかさとしたたかさだと思いますが、看護未来塾を通じて、彼らに光が注ぐような環境づくりができればと思います。